

【日本の気候変動2025】と農業

文部科学省と気象庁は「日本の気候変動2025」を発表した。21世紀末の日本はどうか？ 工業化以前と比した世界平均気温の上昇量が2℃上昇シナリオ（パリ協定の2℃目標が達成された世界）と4℃上昇シナリオ（追加的な緩和策をとらなかった世界）による将来予測をしている。

日本では気温の上昇は勿論のこと、激しい雨が降り、台風が強まり、海水温も上昇するといった従来の「温帯気候」ではない気候になっていくと予測される。（図参照）

将来予測まとめ

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN 気象庁 Japan Meteorological Agency

21世紀末の日本は、20世紀末と比べ...

※ 黄色は2℃上昇シナリオ、赤色は4℃上昇シナリオによる予測

年平均気温が約1.4℃/約4.5℃上昇



猛暑日や熱帯夜はますます増加し、冬日は減少する。

日本近海の平均海面水温が

約1.13℃/約3.45℃上昇



世界平均よりも上昇幅は大きい。

降雪・積雪は減少

雪ではなく雨が降る。ただし大雪のリスクが低下するとは限らない。



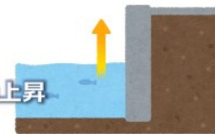
激しい雨が増える

日降水量の年最大値は約12%（約13 mm）/約27%（約28 mm）増加。50 mm/h以上の雨の頻度は約1.8倍/約3.0倍に増加。



台風は強まる
台風に伴う雨は増加

沿岸の海面水位が約0.40m/約0.68m上昇



3月のオホーツク海海面面積は約32%/約78%減少



【参考】4℃上昇シナリオでは、21世紀末までには夏季に北極海の海水がほとんど融解すると予測されている（IPCC, 2021）。

日本周辺海域においても世界平均と同程度の速度で海洋酸性化が進行



参考文献

IPCC, 2021: Climate Change 2021: The Physical Science Basis. Contribution of Working Group I to the Sixth Assessment Report of the Intergovernmental Panel on Climate Change [Masson-Delmotte, V., P. Zhai, A. Pirani, S.L. Connors, C. Péan, S. Berger, N. Caud, Y. Chen, L. Goldfarb, M. Gomis, M. Huang, K. Leitzell, E. Lonnoy, J.B.R. Matthews, T.K. Maycock, T. Waterfield, O. Yelekçi, R. Yu, and B. Zhou (eds.)], Cambridge University Press, Cambridge, United Kingdom and New York, NY, USA, 2391 pp., <https://doi.org/10.1017/9781009157896>.

25

出典：文部科学省及び気象庁「日本の気候変動2025」より引用

このような気候の変動は「農業」にとっては難題である。今おこなわれている「適地適作」が「適地適作」にならないことを示唆しているのではないかと。「柑橘」や「リンゴ」などの適地が北上し、今の産地は21世紀末には別の果樹を栽培しているかもしれない。連日ニュースで取り上げられている「お米」も栽培時期や品種を変えないといけないだろう。「耐暑品種」の作付けによって21世紀末の日本では「今とは違う品種のお米」を食している可能性がある。特に「お米」は日本人の主食であり、今の「お米」の流通の混乱を見ると少しのブレが大きな反動となって消費者に負担を強いることになっている。「お米」は主食だけでなく「飼料」「お酒」「調味料」などの日本の食生活に必要な食材にも利用されている。

また農業生産者の減少は顕著であり、農業生産が減少していくことは明白である。「儲かる農業」による「農業活性化」をはかることが必要だ。省力化を図ったうえで「儲かる農業」になるように農業関係者も知恵を絞らないとならない。例えば肥料業界では猛暑の中で追肥作業が困難になるという前提で、非樹脂の緩効性肥料をどのように活用するかなど新しい肥料の開発が待ち望まれる。

気候変動のシナリオや農業者の減少という色々な難題を抱え、また変化していく周辺環境等に対応できるように、日本農業の舵取りを農水省に大いに期待したい。

～EXPO 2025 大阪・関西万博開催～

2025年4月13日、大阪市此花区の人口島・夢洲(ゆめしま)にて2025年日本国際博覧会(略称「大阪・関西万博」)が開催されました。国内では2005年の愛・地球博(愛知万博)より20年ぶりの開催です。そこで大阪・関西万博についてご紹介致します。

今回の万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」には、世界中すべての人にとって「幸せな生き方とは何か?」を考え、「“すべての”いのち輝く未来社会」のためにアイデアを出し合ったり、解決方法を共に考えたりして欲しいという思いが込められています。また、単なる展示会ではなく、これからの暮らしや社会がどう変わっていくのかを実際に体験したり、試すことができる「未来社会の実験場」となっています。

さて会場内には、ひととき存在感のある「大屋根リング」があります。「多様でありながら、ひとつ」という万博の理念を表す大阪・関西万博のシンボルであり、1周およそ2km、幅約30m、高さ最大約20mの世界最大級の木造建築物です。その構造は、日本の伝統的な木造建築技術である「貫(ぬき)接合」と最新の木造建築技術を融合させたものです。リングの下部は「グランドウォーク」と呼ばれ、来場者の動線となるとともに、雨や日よけの機能も有しています。また上部には「スカイウォーク」という遊歩道があり、会場内の様々なパビリオンを見渡すことができます。また、場所によっては夕日、晴れていれば淡路島や瀬戸内海まで見ることができるそうです。

万博では様々なテーマや視点から多様なパビリオン(展示施設)が展開されます。これらは大きく4つのカテゴリーに分かれます。まず「海外パビリオン」は海外の国や地域、国際機関が出展、自国の文化や技術、未来への取り組みを紹介しています。また個性あふれる建築作品も見どころのひとつです。続いて「国内パビリオン」は日本政府や地方自治体が出展、地域の魅力や伝統文化、先端技術などを発信しています。「民間パビリオン」は企業や団体が出展、企業の個性や創造性、企業がどのような未来を描いているのかを見ることができます。その中で三菱グループは「三菱未来館」を出展、「JOURNEY TO LIFE」をテーマに、深海から宇宙へと生命の起源を探る映像体験型シアターを展開しています。そして「シグネチャーパビリオン」は万博のテーマを深く掘り下げて表現する象徴的なテーマ館となっています。来場者が「いのち」について考え、その概念をアップデートする場となることを目指しています。

パビリオン以外では、参加国や地域が日替わりで自国の伝統芸能や音楽を通して文化交流をする「ナショナルデー」、音楽イベントや演劇、祭り、ワークショップなど多彩なプログラムが開催されています。日が暮れるとライトアップされた大屋根リングやパビリオン、光と音が融合する噴水ショーなど、昼間とは違う幻想的な雰囲気を楽しむことができます。一日で全てのパビリオンを回ることはできませんが、パビリオンでの体験、各種イベント、各国のグルメなど、色々な楽しみ方ができるのではないかと思います。

会期は2025年10月13日迄です。大阪・関西万博へ足を運び、未来の可能性を感じてみるのはいかがでしょう。また万博を体験された後には「食い倒れの街」大阪で、多彩なグルメも堪能頂ければと思います。(大阪支店)

先日、家でお好み焼きを作ったところ、キャベツが思いのほか多かったようで「キャベツ焼き」になってしまいました。分量難しいですね。味は美味しく出来上がりました。

